

6月16日(土)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 山村浩二さん アウトプットイベント 「デジタル発和書の旅 山村浩二、蕙齋に逢いにゆく」

1, イベントの概要

山村浩二さんがないじえる芸術共創ラボのなかでどのような取り組みをしておられるのか、広く知っていただくためにアウトプットイベントを行うことにしました(2018年6月16日(土)、於 国文

トークイベント
デジタル発 和書の旅

と き・平成30年6月16日(土)
14時開演(13時半開場~16時終了予定)

と ころ・国文学研究資料館
2階 大会議室 東京都立川市緑町10-3

山村浩二、
蕙齋に逢いにゆく

主 催：国文学研究資料館
協 力：凸版印刷株式会社

江戸時代に活躍した絵師・墨形
蕙齋(くわがさい)の作品を
デジタル技術の力で再現し、
新たな発想と表現を見
出す「デジタル発 和書の旅」
シリーズ第二弾

日本を代表するアニメーション
作家・山村浩二さんご、当館の
ロバートキャンベル館長、木
越俊介教授によるトークセ
ッション

江戸時代に活躍した絵師・墨形
蕙齋(くわがさい)の作品を
デジタル技術の力で再現し、
新たな発想と表現を見
出す「デジタル発 和書の旅」
シリーズ第二弾

平成30年度 国文学研究資料館
アーティスト・イン・レジデンス
山村浩二

モデレーター
国文学研究資料館館長
ロバートキャンベル

モデレーター
国文学研究資料館 准教授
木越俊介

● 企画
● 企画 1日限 (写真に準じた案、紙面作り)
● 制作
● 印刷
● 配布
● 配布先
〒103-8265 東京都中央区本町2-1-1
convex@convex.co.jp
*メールの件名は「デジタル発和書【発信者名】」とし、
本名に氏名・住所、電話番号を明記願います。
*ご質問の際は、メールの返信も、
電話でも構いません。
● 問い合わせ先
kibakakko@il.ac.jp

国文学研究資料館
凸版印刷株式会社
ないじえる芸術共創ラボ

学研究資料館大会議室、協力：凸版印刷株式会社)。

題して「デジタル発和書の旅 山村浩二、蕙齋^{けいさい}に逢いにゆく」で

す。

「デジタル発和書の旅」とは、凸版印刷(株)が開発したアプリケーションを用いて全国各地をまわるイベントのシリーズ名で、昨年度の鳴子温泉での開催に続く第二弾ということになります。今回は、山村さんの原画やアーカイブした当館所蔵の古典籍をアプリケーションに取り込み、それらを活用しながらトークイベントを行いました。



た。

2, 第1部「蕙齋と描く」

6月16日(土)

山村さんはこのプロジェクトに参加してくださった当初から、古典における夢の表現に関心を抱いておられました。そこで、夢を描いた場面が登場する様々な時代の古典籍をご覧いただいたり、日本における夢の描写法がどこから来たのかについて考えるWSを重ねてゆき(夢の描写について山村さんがお考えになっていることについては、2018年3月9日に行われた「デジタル発和書の旅 湯とアートが鳴子で出会う」にて語ってくださいました)、江戸時代に活躍した文人の上田秋成が書いた「夢窓の鯉魚」¹(『雨月物語』所収。安永五年<1776>刊)という作品を原案としたアニメーション作品を創作することを決められました。

山村さんが創作されているアニメーション作品には「ゆめみのえ」というタイトルが付けられています。

さて、「ゆめみのえ」の創作にあたり、もうひとつ重要なモチーフとなったのが、上田秋成と同時期に活躍した絵師・鋏形蕙斎(北尾政美)²が描いた絵手本『略画式』シリーズです。『略画式』とは、蕙斎が簡略な線で動植物や人物などを生き活きと描いたイラスト集的な性格がある作品で、山村さんは『人物略画式』²『鳥獣略画式』³を模写し、それらを素材として「ゆめみのえ」の場面を構成しておられ

¹ 国文学研究資料館蔵。貴重書 99-125-1~2
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200014740/viewer>

² 国文学研究資料館蔵。ヤ 8-123

ます。

まずは、「ゆめみのえ」のあらすじについてご紹介します。

蕙斎は日頃から鳥獣を観察している。観察しながら、自分と鳥獣を一体化して妄想の世界に入り、様々な鳥獣に自分が同化することで、動物たちの所作を生き生きと描くことができる。

夜、蕙斎は夢のなかで、鷹になって空をとび、鷹の視線で世界を見る。目が覚めた時、「はたして自分は鷹になった夢をみていたのか、それとも今の自分は鷹が見ている夢なのか」とつぶやく。

またある時、鯉になる夢を見た蕙斎は、池で泳いでいると、漁夫に釣られ、城内の台所に運ばれてしまう。

「夢窓の鯉魚」をまだ読んでおられない方のために詳細は省きますが、「夢窓の鯉魚」の主人公は絵の達人な僧侶(興義)であり、“写実”が重要なモチーフです。

山村さんは、秋成と蕙斎が同じ時代に生きた人物であると気付いたことで、「夢窓の鯉魚」の主人公と蕙斎との間に“達人な画家”という共通点を見出されました。そして蕙斎をストーリーの主人公に

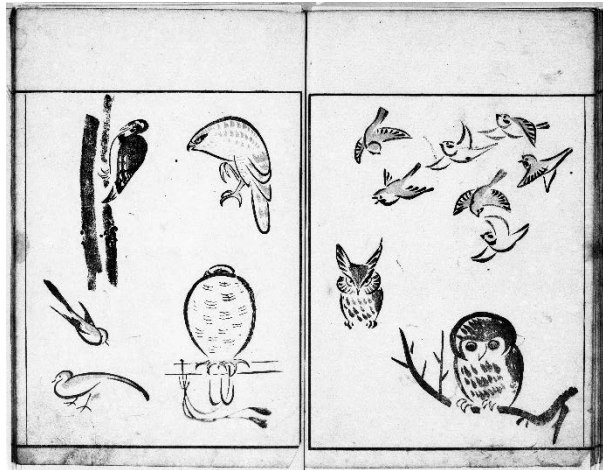
<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007682>

³ 国文学研究資料館蔵。ヤ 8-127

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007686>

6月16日（土）

置き換えると急に構想が始まり、たくさんのピースがはまったそうです。



第1部では、江戸時代の小説を専門に研究しておられる木越俊介

先生（当館准教授）と一緒に登壇いただき、アプリケーションで山村さんの原画と『略画式』とを比較しながら、山村さんが『略画式』のどのような点に注目しておられるのかについてお話を伺いました。

3、『略画式』を模写する

「ゆめみのえ」創作の際には、『略画式』の思いついたところを模写しながらストーリーを考えてゆくという山村さん。お手元にある『略画式』の複製版（山村さんご所蔵の複製版についての話題は、平成30年5月10日の日誌をご参照ください）をトレースし、模写を続けることで、蕙斎のタッチを体得されたそうです。

模写を続けて改めて分かったことは？という木越准教授の問いかけに、山村さんは、蕙斎の絵には漢字のように書き順があることに気付いたと教えてくださいました。その書き順の通りに描かなければ、蕙斎の絵の形を捉えることができないそうです。

また「ゆめみのえ」では、特別なところを除いて、蕙斎と同じ大きさで、同じ色数を用いて描く（『略画式』は多色刷の大変美しい本です）という挑戦をしておられるそうです。

たとえば雀は薄墨、墨、赤の三色を使って描かれています。山村さんは、薄墨の部分を描き、墨を入れ、赤を乗せるという手順で模写されたそうですが、その作業を通して、一匹たりとも同じ雀がない

6月16日（土）

ことに気付かれたそうです。

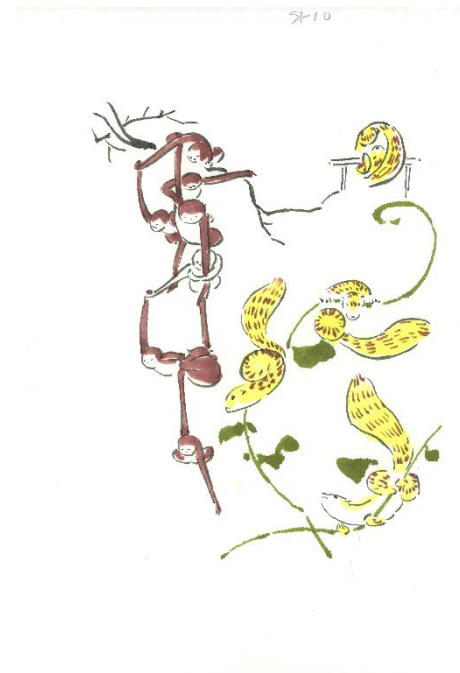


色の話題から、画材の話も聞かせていただきました。

最初は和紙に描いておられたそうですが滲んでしまうため、現在は薄黄色の洋紙に直接描くことにしているそうで、この優しい黄色は「ゆめみのえ」の背景になっています。また、水彩絵の具と墨を使い分けておられることも教えていただきました。

『略画式』の特徴は、なんと言っても大胆にデフォルメされた線だと思のですが、山村さんはひとつひとつの絵に動きを感じたり、蕙斎の捉えたアングルに驚いたりされているとのこと。

たとえば「ゆめみのえ」でたくさんの動物が登場する場面があります。その中に棒をもってぐるぐるとまわるイタチが描かれています。山村さんは、蕙斎が描いたイタチを見た時からまわっている姿



がみえたそうで、彼らの動きは蕙斎の絵から導き出されているのだということを語っていただきました。

また、『略画式』にはトンボが真正面から捉えられた絵が描かれています。線一本で真正面からみた羽が表現されており、信じられない位シンプルなのですが、それでもトンボと分かるのです。山村さんはこういった描写の巧みさに驚きながら、模写を続けたそ

うです。この正面からみたトンボは、「ゆめみのえ」の中にも印象的に登場しています。

ところでアニメーション作品は動きがあるため、静止面の『略画式』には描かれていないアングルをも登場させる必要があります。山村さんは、『略画式』に描かれている動物たちの正面図、真横の図、後ろの図などを、キャラクター設定表のようにとらえ、頭の中でそれらの絵を繋げて360度の描写を可能にしているそうです。

こういったことは、何度も『略画式』を模写し、蕙斎の筆遣いや空

6月16日（土）

間の捉え方をきちんと把握しているからこそ可能なのだと思います。

また同時に私は、“絵手本”という存在についても想いを馳せていました。元々日本の職業的絵師達は、先達の仕事に倣って型を守りながらそれぞれの流派が担う絵を描いています。彼らが仕事を全うするには、お手本を手掛りとして先人に倣うことが大切だったのです。また印刷技術が発達した江戸時代には、プロの絵師が刊行した絵手本が多く出回り、プロではない人たちも、それらを見て絵を描いたかも知れません。有名な『北斎漫画』は、そういった絵手本の一例です。

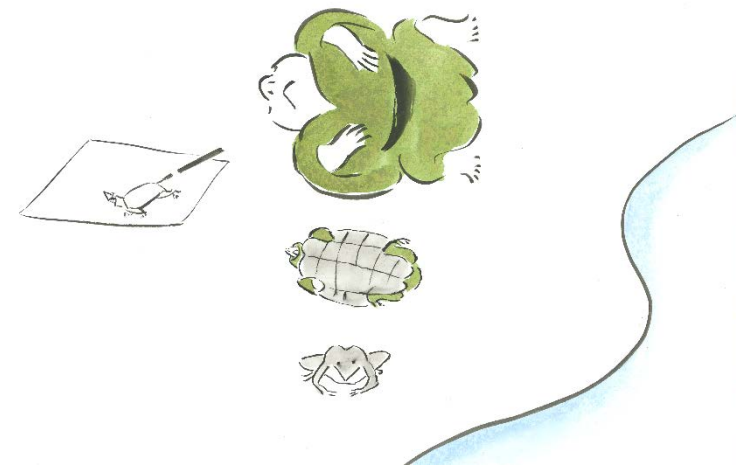
『略画式』には、「絵を描く方法を伝えるための本であり、即座に絵が描けるようになる」という趣旨の広告文が載っていますが、山村さんから写實的に描くよりも難しいということを知っていたため、広告文は本屋が販売促進のために書いた建前だったのでは?!という考えを持っていました(2017年10月19日日誌参照)。しかし山村さんが何度も模写して蕙齋の絵を体得したという話をうかがうと、やはりその広告文に(誇張があるにしても)偽りはないように思われます。重要なのは、何度も模写するということ。これまでなんとなく、絵手本を見ると一回で上手に描けるようになる、と思いついていたのですが、練習するという過程を無視してしまっていたと思います。しかし時間をかけて何度も模写することで、最終的には蕙齋とシンクロする境地にまで至ることができるのです。

山村さんの挑戦や努力をうかがい、研究の立場からは見逃しがちな”表には現れない時間”がいかに重要であるかを思い知りました。このことは、私の研究にとって大きな意味を持つ気づきだったと思います。

4, 蕙齋と山村さんの目線

自らを「憑依型」と評される山村さん。作品を描いている間、その世界観にどっぷり浸かってしまうそうです。

そのことが作品にも投影された一例として、「ゆめみのえ」の中でケイサイくん(作中のキャラクターとしての蕙齋は「ケイサイくん」と呼んでおられるそうです)が亀になるシーンを示してくださいました。



6月16日（土）

それは、亀をじっと観察しているケイサイくんが次第に亀になってゆき、その経験を絵に描くというものです。これは、蕙斎はきっと対象をよく観察し、憑依することで、まるで生きてるように本質を描くと山村さんが考えられたため、このような表現になったとのこと。「夢応の鯉魚」の主人公である興義も、描く対象に憑依するような描写があります。

また、登場する動物や人物と同じポーズをしながら描くことがあるそうなのですが、「蕙斎もなりきって描く人だろうな」と想像されるそうです。

こういったことから、山村さん、蕙斎、興義の三人の視線が一致していることが窺えます。描き手としての関心が深いところで繋がり、「ゆめみのえ」の中に山村さん自身も登場しているのです。

また山村さんは、動物だけでなく、人物に向ける蕙斎の視線についてもお話くださいました。

山村さんが『略画式』を観察したところによると、人物については形よりも動きを重視する特徴があるそうです。簡単な線だけで描いてあるのに動きを想像させ、しかも様々なパターンの描き方をしていることに気付かれたといいます。

以前山村さんは、『略画式』に描かれた男性や動物に比べて、女性の絵の手数が多いことから、線にもたつきがあり苦手とした対象ではないかと考えられていましたが（2017年10月19日日誌参照）、

他の対象よりも細い線を用いて描いていることに気付き、蕙斎は女性になりきって描いているため、女性のもつ繊細さが出ているのではないかと考えを改められたと語ってくださいました。

手を動かす時間を重ねられることで、作品に対する印象が変わったり、作者に対する理解が深まっていったりするのですね。



さらに、『略画式』に描かれた風俗についても語ってくださいました。たとえば魚屋さんが持っている魚や、道を歩いている犬といったディテールが大変よく描けているとのこと。これらは2～3cm程度の大きさですが、魚がカツオであると判別できたり、犬が描く

6月16日（土）

のが難しい正面を向いていたり、丁寧に描き込まれているそうです。こういったディテールからは、当時の風俗の様子が伝わって来ると同時に、蕙斎がどのような目で江戸の街を観察していたのかが分かるといいます。

こういった蕙斎の目を通して描かれた江戸の風景は、「ゆめみのえ」にも登場し、当時の活気を私たちにを見せてくれています。

第一部のお話では、山村さんが「ゆめみのえ」の創作を続ける中で、理解を深めたり強く関心を抱かれた点についてお話しいただくとともに、アニメーション制作の技術的な面についても語っていただきました。

5, 第2部「蕙斎と歩く」

第二部は、山村さんとロバートキャンベル館長、そして私有澤とで、蕙斎が江戸の名所五十ヶ所を上空からの視点で描いた「江都名所圖會」⁴（えどめいしよずえ、天明5年〈1785〉刊）を鑑賞し、江戸の街を散歩するという内容です。

まずは、キャンベル館長と有澤とで、この作品の文学的意味について簡単な解説を行いました。

江戸時代後期、各地の名勝地を、絵と文と共に記載した名所図会が

流行したのですが、それらは冊子本が多いのにひきかえ、「江都名所圖會」は珍しい巻子本仕立てです。それも、主に青色を使った多色摺りの版本で、大変に凝った雅味溢れる作品です。



この絵巻の風景画には、それぞれの土地にちなんだ発句が添えてあり、巻子の末尾「東都 夢仏庵主人撰」と書いてあることから、それらを選び編集した人が夢仏という名であったことが知られます。当時は多くの人が俳諧を詠んで楽しんでおり、夢仏が仲間たちの俳諧をあつめ、蕙斎に絵を描いてもらい自費出版したのではないかと考えられています。

⁴ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200016950/viewer/>

6月16日（土）

また、上野から始まり蓬来宮で終わるこの風景画ですが、巻頭と巻末には芭蕉の句が掲載されており、特に江戸のシンボリックな土地と句とを置くことで、江戸の繁栄を寿ぐ意図があったと考えられます。

さてこの作品は、以前も山村さんにご覧いただいたことがあり、「ゆめみのえ」の一部にとりいれていらっしゃいます。

それは末尾の富士山と、大名行列。

ケイサイくんが驚くなって上空から江戸の街を見下ろす場面で、『略画式』とは対照的に詳細に描き込まれた風景画を効果的に採り



⁵ 個人蔵。『江都名所圖會』の複製（大空社、1993年）に拠る。

入れておられました。

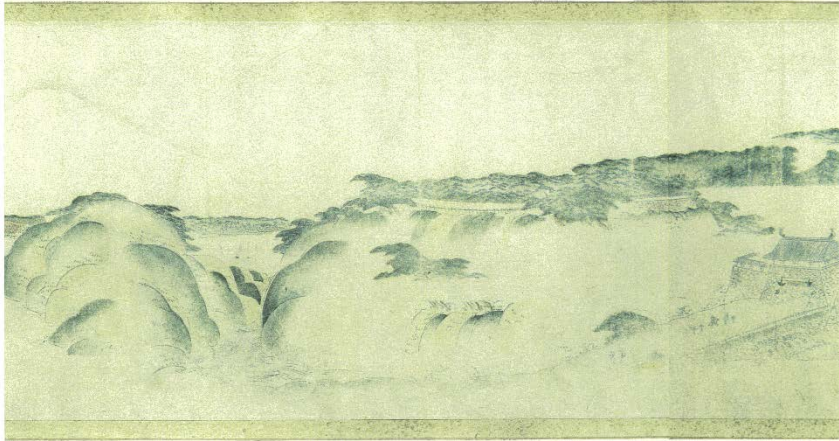
ところで国文研蔵の「江都名所圖會」には、五十景のうち四十九景しかありません。調べてみると、山村さんがお使いになった富士山の風景に付されているタイトルが、本来のものと一致しないことが分かりました。

国文研の「江都名所圖會」の末尾は「飛鳥山」となっていますが、本来なら「蓬来宮」……江戸城が描かれています。幸い他の資料⁵で補うことができたので確かめてみると、元旦に江戸城へ挨拶に向かう大名行列が描かれていました。富士山はその続きの風景でしたので、国文研にやってくる前に、大名行列の部分だけが切り取られ、飛鳥山の最後と蓬来宮の最後とが繋ぎ合わされていたものと考えられ



6月16日（土）

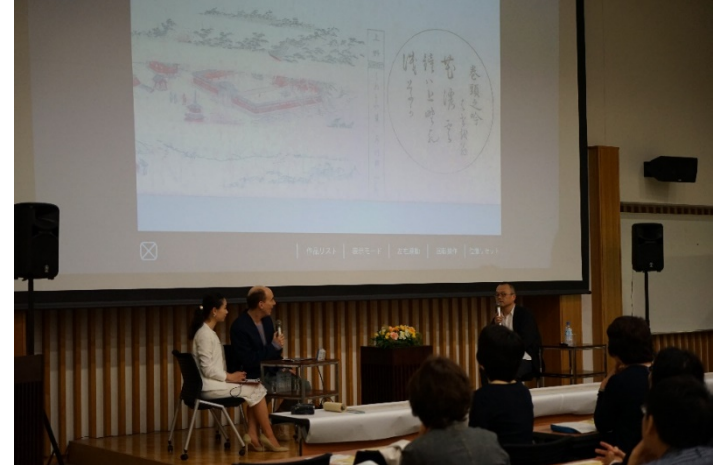
ます。



とてもお目出度い図柄ですので、そこだけ切り取って飾っていたのかもしれませんが。古典籍が辿って来た道のりを考えるのもとても面白いですね。ちなみに大名行列も、富士山とならんで江戸っ子自慢の名物でした。この絵巻には、そういった江戸のシンボルがたくさん描かれています。

「江都名所圖會」はとても長い作品で、蕙斎は場所によって紙幅をたっぷりとったり、あえてスッキリとコンパクトにまとめたりとメリハリをつけて五十景を描き切っています。来場者の方にも、是非そういった点を臨場感をもって楽しんでいただきたいと、前方にひろげた絵巻を手持ちのビデオカメラで撮影して前方のスクリーンに映し、山村さんやキャンベル館長の目線と同じようにご鑑賞いただ

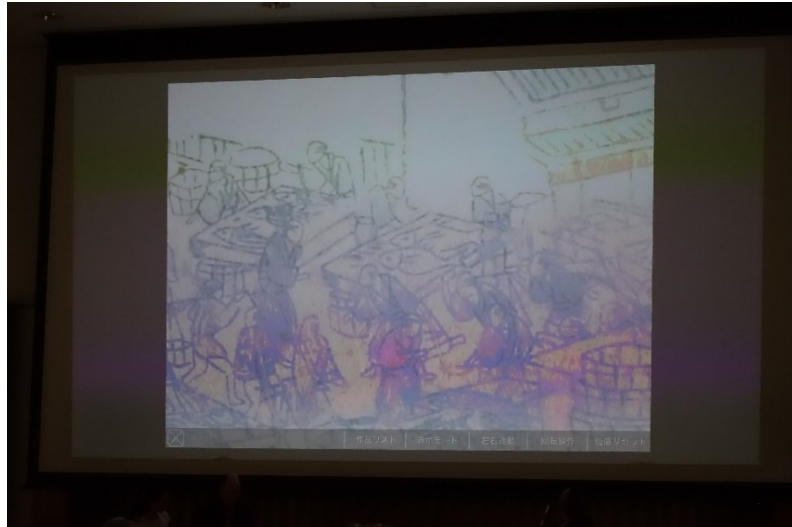
いたり、詳細に観察したい箇所については凸版印刷開発のアプリケーションを用いて拡大したりして、資料を鑑賞する方法にもこだわりました。



6月16日（土）

たとえば日本橋は様々な人が行き交い、活気ある場所として描かれています。ここは交通の要所、人や物が集中した場所でした。魚を売る「棒ぶり」の荷物をのぞいてみると、とても小さいながらカツオが描かれていることが見て取れます。添えられている発句を見ると「箔のつく人やかつほの日本橋」「江戸なれや四月朔日初松魚」……カツオに関する句が並んでいます。やはり江戸の名物として描かなければいけないアイテムなのでしょう。

こういったディテールに、第一部で山村さんがお話くださった蕙斎の観察眼が宿っているように感じ、ひとりひとりの動きをじっくり眺めてしまいました。



また、品川は現在イメージする街中とは違って、広々とした海や、そこで潮干狩りをする人達が描かれます。そして文人、墨客が多く住んだ文化的な隅田川。こういった場所は、ゆったりと紙幅をとり、のびやかな線で空間が表現されています、と山村さん。線を綴じずに空間の奥行きを出す方法は、『略画式』にも通じるところがあるとのことで、一見別のベクトルを目指しているようにもみえる二作品にも、蕙斎の筆や目線が生きているということが分かりました。



6月16日(土)

6, 来場者との交流—原画と古典籍に触れる—

折角の機会なので、山村さんに「ゆめみのえ」の貴重な原画をご参
いただき、山村さんが参照された古典籍と共に展示するスペースを
設けました。

休憩時間には、山村さんをはじめ館内教員が資料近くで解説を行
ったり質問に答えたりし、ご来場いただいたみなさまと、充実した
時間を共有いたしました。



6月16日(土)

